

「攻めの農業戦略」で挑戦を続ける梨産地の育成

県西農林事務所経営・普及部門

下妻市の梨産地においては、土壤病害（白紋羽病）対策として、切り株の抜根から、薬剤を用いない土壤消毒、大苗を利用したジョイント栽培による改植までの一貫体系の実証を推進しています。また、生産者に対して担い手調査を行い、潜在的な担い手の掘り起こしや、新規参入者の参入支援、スマートウォッチやドローンなどのスマート農業技術を利用した作業の見える化などに取り組み、儲かる梨産地の育成を支援しています。

土壤病害対策とジョイント栽培の普及拡大

土壤病害（白紋羽病）対策として、ワイヤーを用いた簡易抜根技術や、太陽熱還元消毒を実施し、さらに大苗利用による改植を推進しました。改植にあたっては、未収益期間の短縮が可能な大苗を用いたジョイント栽培を導入し、平成27年の初導入以来、面積は令和3年には77aまで増加しました。また、導入6年目の豊水園地では成園化による単収が3.5t/10aにまで達しました。



写真1 簡易抜根からジョイント栽培への改植

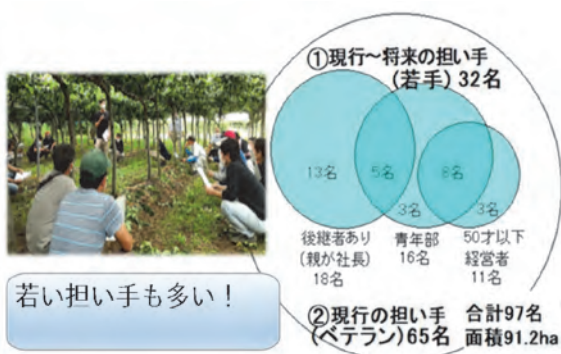


写真2 生産者アンケートの実施と担い手育成

担い手の現状調査と産地の受入れ体制の整備

全生産者を対象にしたアンケート調査と聞き取り調査を、関係機関と連携して行い、担い手の現状や、潜在的な後継者の有無を明らかにしました。また、新規就農者（新規参入者）の受入れに向けた産地の体制を、生産者・関係者で検討・整備し、2名の新規就農者（雇用就農者）の受入れに結びつきました。

スマート農業技術による農作業の見える化

スマートウォッチを利用し、スピードスプレーヤの軌跡の見える化や、作業時間、移動距離、10aあたりの農薬散布量などを数値化することができました。また、ドローンによる梨棚面の空撮と、フリーソフトImageJを用いた画像処理により、簡易に棚面率や単収 (kg/10a) を把握できるようになりました。このような作業や栽培状況の見える化により、今後の作業・栽培改善へつながることが期待できます。

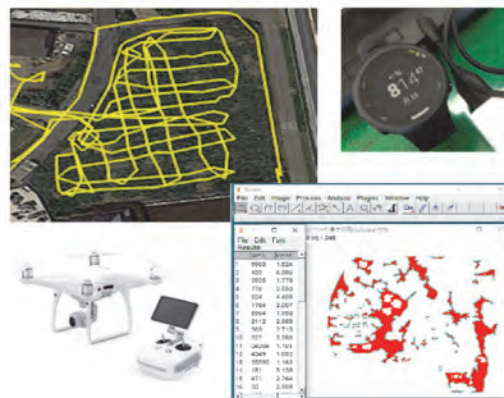


写真3 スマート機器を用いた作業の見える化